

## 東京芸術祭ワールドコンペティション 2019: 一批評家審査員としての回想

コーディ・ポールトン (カナダ・ヴィクトリア大学)

東京芸術祭ワールドコンペティションの批評家審査員を務めるのは貴重な経験でした。まずはワールドコンペティションのディレクターの横山義志様、助手や通訳を務めた皆様に深い感謝を申しあげたいと思います。素晴らしいイベントでした。舞台芸術の審査は初めてなので緊張しましたが、大変有意義な試みでした。将来またこういうコンペティションがあれば審査員をしたいと思います。色々勉強になりました。

初日に横山さんが説明したように、今度のコンペティションでは世界の舞台芸術にとっての新しい基準を見つけることが大きな目的でした。近・現代の世界の演劇・舞台芸術のほとんどはヨーロッパの基準で評価されるようになりましたが、21世紀には世界経済の中心がヨーロッパからアジアに移ってきたように、芸術の評価も新しい尺度で評価すべき時代になりました。六つの地域—アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニア、そしてホストの国・日本—から、その地域の舞台芸術に詳しい推薦人にそれぞれ一つの演目を参加作品として選んで上演してもらい、アーティスト審査員と批評家審査員、そして観客の皆さんに受賞作を決めてもらうという試みはとても斬新でした。そもそも上演された作品を評価する基準についてなかなか考えさせられる仕事でした。審査基準は、1) 2030年に向けて、舞台芸術の新たな基準を提示しているか、2) その価値観の提示において、技術的に高い質を持った表現をなされているか、ということでしたが、1) 一つまり、その新たな基準—を定義するのはとても難しかったのです。その6本の演目は一人芝居から対話劇、音楽劇や影絵芝居など、それぞれ表現の異なったもので、比べるのに非常に困りました。アーティスト審査員と違って批評家審査員は優れた作品を一つだけ選ぶ使命だったので、いよいよ苦労しました。批評家審査員は初めての打ち合わせの時、「なんとなく」決められるだろう、と皆さんあっさりおっしゃっていましたが、6本を見てから、やはり皆さんは意見や好みがばらばらで、討論も長くなり、決定も長引きました。受賞作を決めるのに投票することになり、その結果には、私は審査員のファシリテーターとして、少しびっくりしました。私個人のチョイスではなかったのです。

一つ一つの作品を評価するために、見た順番に述べたいと思います。最初はヨーロッパの参加作品、バルセロナの劇団エル・コンデ・デ・トレフィエルの「可能性は風景の前で姿を消す」でした。とても脚本の凝った作品で地球温暖化やセックスや政治や芸術の無力さなどなど、特に現代のヨーロッパで話題になっている課題を次々に繰り広げ、様々な場面と所作で演じられていて、とても面白かったです。哲学的な脚本と演者のたわいもない所作とのギャップは岡田利規の舞台を思い出しました。ここでも岡田っぽい「ノイジーな体」を見せていました。つまり、俳優たちが表現していたのは、テキストよりもどこか自分の身体の中に潜んでいる無意識だ

ったのです。終わったら、審査員の同僚のアダム・ブロンフスキさんは自分の息子が好きそうな作品だと言いました。「かなり哲学的な息子ですね」と私が言うと、「違います。タイツを履いて踊っている男達やネギと人参とバナナで卑猥な遊びをしている連中を面白がっていたでしょう。これは10歳未満の男の子、あるいは45歳以上の観客のための劇だ」と答えたら、なるほどと思いました。

次に見た演目はアフリカの参加作品でブルキナファソのシャルル・ノムウェンデ・ティアンドルベオゴの「たびたび罪を犯しました」という、音楽と仮面と美しい身体で表現した一人芝居でした。いかにもキリスト教を喚起する題名ですが、話はシャーマニズムのようでした。ある男は死霊の供養をしに墓地にやってくると、その死霊に取り憑かれ、それぞれの生涯と末期を語ります。疫病や賄賂などの政治腐敗がテーマで内容も表現もまさに「アフリカ！」と叫びたいほど著しかったです。知的で文芸的な、あまりに文芸的な「可能性は風景の前で姿を消す」は「ヨーロッパ！」と叫びたくなるもので、この二本の作品は対照的でした。問題意識と表現の面でヨーロッパ大陸とアフリカ大陸の文化はこれほど違うのだな、としみじみ感じました。

次に見た作品はオセアニアの参加作品でオーストラリアの現代オペラ「ハウリング・ガールズ」でした。ソプラノのジェーン・シェルドンと五人の少女達のコーラスが言葉を使わずに生の声—つまり、叫び—によって女性のトラウマを描いていました。テルミンを弾くジャック・シモンズの音楽は妙に人間の声に似て、目にも耳にも衝撃的に訴える印象深い作品でした。ニューヨークの世界貿易センターの同時多発テロ事件の際、病院を訪れた「呑み込めない」という症状を持った十代の若い女性達の話からヒントを取ったそうですが、トラウマを経験した女性はその原因を言葉では言い表せないものの、口から発する叫びは十分な表現力がある見事な音楽劇でした。

アメリカの参加作品チリのボノボという劇団の「汝、愛せよ」という劇は「可能性は風景の前で姿を消す」のように、脚本のしっかりしたものでした。演技もよかったです。近い将来。医者達は学会で難民として地球にやってきた宇宙人にどう対応するかという発表を準備する話でしたが、自分にとって一番印象的な場面はそのプロローグでした。仮説的な事ではなくて、過去に実際にあった事件を表したのです。16世紀にヨーロッパ人が南米を植民地にした時の、二人のスペイン人の神父と一人の原住民の男との話。これは私個人の印象に限らないかもしれませんが、その遣り取りは滑稽ながら、一方、その秘められた異人種に対する違和感と暴力には後半話題になっていた宇宙人の話にはなかった現実感と説得力があったのです。言葉豊かな対話劇で、字幕に追い付くのに精一杯でした。

次に見た演目はアジアの参加作品、中国の戴陳連（ダイ・チェンリエン）の『紫気東来-ビッグ・ナッシング』でした。これはアフリカの代表のように一人芝居でしたが、「おばあちゃん」という片言以外にすべてが舞台にある小道具と影絵で表現

した不思議な、美しい作品でした。作者の戴陳連が祖母と過ごしていた故郷の紹興市が舞台で、中国の近代小説の父、魯迅と、唐時代の怪談集『酉陽雜俎』をほのめかしながら、ノスタルジーと夢の世界を見事に描きました。最後に白い鳩が袖からの登場で目が覚めた、と作者に終わってから述べると、「本当に覚めたのか、それともまだ夢を見ているのか」と答えて、流石にこの夢と現と、この世とあの世を彷徨っている作品だ、と感動しました。決して「ビッグ・ナッシング」ではなかったのです。作者にその題名のことを尋ねると、実は「紫氣東来」は杜甫の詩からの引用で、都落ちした詩人が故郷に帰るというイメージを呼び起こす、と教えました。なるほど、この劇は表面的にはただ一人の個人的な回想を描いているようですが、政治的な意味も潜んでいるのではないかと、思いました。つまり、自分は現代の社会には合わなくて、昔の人の大事な生活の仕方と価値観とをしっかりと蘇らせたかったのではないかと、思ったのです。

最後に見た作品は日本の参加作品、大阪の dracom の「そこない図」でした。二人姉妹が餓死する実際にあった事件に基づいた優れた劇でした。これもしっかりした脚本があり、反復する台詞でとても素直に、しかも心に響いて、観客の目の前に静かな力でその死にゆく姉妹を演じていた役者も素晴らしかったです。死ぬことがわかっていましたが、いつ死ぬかというのは観客の期待と悩むところでした。姉妹の一人が手を開けて五円玉を落とす時に、ある観客はこれで劇が終わると思って拍手し始めたが、まだまだ芝居が続きしました。これは自殺か、それとも自然死か。二人の姉妹には親譲りの家が奪われ、お金も取られ、無関心な社会にも自分たちの存在も奪われるところで自分の命は自分の手にしかないとも思わせる、とても悲惨な話でした。その詩的な韻律のある台詞はベケットを呼び起こしたが、これは大阪らしくセンチメンタルな、ウェットなベケットでした。それを見てから私は自分の幸せと食欲を責めながら遅いお昼にありつけたのです。審査員の同僚達と後で感想を話すと、この作品の現代日本人の敗北感にどう対処したらいいかと当惑しました。

「絆」を大事にしているはずの現代社会はこの姉妹を放置してはいけないのではないかと、痛感しました。

判決：

敗者のない競争かもしれませんが、受賞作を決めるのはなかなか難しかったです。作品はみんな優れたところがあり、一方ではもう一つと考えるところもありました。自分が一番好きだった『ビッグ・ナッシング』は、審査員によっては、あまりに分かりにくくて、社会性と政治性に欠けているという反論もありました。「ハウリング・ガールズ」も人によってはあまり斬新さを感じなくて、しかもその課題と実践は矛盾しているという意見がありました。つまり、「トラウマ」というものは、そもそも言い表せないはずの経験なのに、見事に表現ができていたという矛盾。

とにかく、「2030年に向けての新たな基準」を定義するのに合意できなかったと考えざるを得ないような気がしましたが、十年後に人類に重要な課題は何か、どの作者がそれを最もうまく表現していたかと、皆さんが「なんとなく」納得したところ

でした。将来性を最も見せている作者は誰かというところに絞りました。その点でチリの劇団ボノボの「汝、愛せよ」に賞を与えることにしました。「異人」に対する差別と暴力という課題は普遍的なもので、多分永遠に残る課題でしょう。脚本も演技も優れた作品でした。全ての代表には良し悪しのところがありました。が、「汝、愛せよ」が一番安全な歩み寄りなのではないか、と感じてなりません。アーティスト審査員も観客もこの作品を選んだのは正解だったでしょう。

コンペティションの間、始めから終わりまで批評家審査員はアーティスト審査員とお話しするチャンスがなかったのは残念に思いましたが、それはあまり自分たちの意見を漏らされないように意図的にしたのではないかと、とも思いました。それぞれの審査員は自分なりの、独立した決定ができるためであったようです。帰りの空港バスでやっと一人のアーティスト審査員とお話できる機会があったので、アーティスト審査員の討論の内幕を少し垣間見られました。「新たな基準」を見つけるため、「decolonization」（脱植民地主義）と「indigeneity」（土着性）という二つの大きな課題があったそうです。アーティスト審査員の中の二人が先住民だったのも偶然ではなかったようです。なぜかという、将来の舞台芸術はヨーロッパの伝統から生まれるのではなく、世界各地の民族性を表現すべきだ、という。つまり、「脱ヨーロッパ」。なるほど、21世紀の芸術の尺度は他の地域から生まれるでしょうが、世界の舞台芸術は様々なもので、一つの基準を決めるのはなかなか難しいのです。